

「総合的な学習の時間」のための教職科目一体育専攻生の キャリアプランニング教育として

三木ひろみ・三波千穂美

Career Planning Program for Physical Education Major Students in the Course of Physical Education Teacher Education at the University of Tsukuba.

Miki¹⁾, Hiromi, and Sannami²⁾, Chihomi

Abstract

We planned and organized a career planning program for physical education major students in the course of physical education teacher education (PETE). Two hundred and fifty one students were divided into 12 classes managed by student teachers with assistance of their classroom teachers and supervised by the authors. The program was composed of processes of the following learning activities, "knowing yourself" "knowing jobs" and "matching you and job." The students were allowed to start the program with their aims corresponding to their levels of career planning which were "knowing about the interesting job," "looking for the jobs in the field of sport and physical education," and "looking for an interesting job."

In the program, 37% of the students only collected information about their interesting jobs, while 27% of them involved in the task of matching them with the jobs, 14% were in the task of job selection, and 23% were in the task of job preparation. Concerning the outcome of the career planning program, 36% of the valid responders appreciated the acquirement of knowledge of job and 25% of them realized they should start to think about their future from now on.

There were levels of activity and understanding among the students. For example, some students completed value scales and understood their values, which is a direct outcome from the leaning activity. Others came to imagine them working in the future, which is a consequence of their problem solving through repeating the learning activities of knowing them and the job and matching with each other.

In conclusion, the revised program of career planning succeed in encouraging students to think about their future jobs and to involve in the learning activities according to their level of career view. However, many students still hesitated to select a job. We need to introduce some instruction or a task for decreasing the anxiety or uncertainty of the future.

Key words: problem solving, career planning, PETE

1) Institute of Health and Sport Sciences

2) Institute of Library and Information Science

1. 序論

1) 「総合的な学習の時間」のための教職科目とキャリアプランニング

現在、中学校・高校の教員免許取得のためには、教職に関わる科目として「総合演習」の単位の取得が必要となっている。筑波大学体育専門学群においては、総合演習Ⅰ（1年次3学期開設）と総合演習Ⅱ（2年次1学期開設）が、それぞれ平成12年度と13年度から開設されている。

中学校並びに高等学校学習指導要領の総則によれば¹⁾、「総合的な学習の時間」のねらいは、(1)自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること、(2)学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること（総則第4.2）である。

生きる力を育成することをねらいとした「総合的な学習の時間」の指導に関する科目として、筑波大学体育専門学群に開設された総合演習Ⅰ・Ⅱでは、将来の進路について考えるキャリアプランニング学習を行なっている。総合演習Ⅰ・Ⅱにおいてキャリアプランニング学習を行うことにした理由は、①「総合的な学習の時間」のねらいである、自ら主体的に課題解決に取り組み自らの生き方を考えることと直結した学習であること、②高等学校学習指導要領の総則に、「総合的な学習の時間」の課題として「国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題」に加えて、「自己の在り方生き方や進路について考察する学習活動」が例示されていること、③以前から行なっている進路指導や進路学習を「総合的な学習の時間」としている高校が多いこと²⁾に加えて、④教職科目とはいえ、受講生は全員が教職を志望して受講している訳ではないため、教職志望でない受講生のモチベーションも高めることができ、2年次以降の学生生活や履修計画を改善できるようにするためでもある。

2) 大学におけるキャリア教育

フリーターやニートが増えており、大学卒業後の就職率も低く、また就職後の離職率も高くなっていることから、単なる就職支援だけではなく、キャリア教育の重要性が高まっている。また、大学においては、学部によって卒業後のキャリアが

方向づけられるという傾向が次第に弱くなっており、多様なニーズを持った学生のキャリア形成を支援するキャリア教育は、ますます難しくなっている。大学によっては、キャリア教育も意図したキャリアセンターの設置や改組（例えば、立命館大学就職部1999年改称；広島大学就職センター2004年改組）や、正課内外でのキャリア教育プログラムの実施（例えば、静岡大学のキャリア形成科目；中央大学のキャリア教育科目；立命館大学のAPUキャリア開発プログラム）によって、この問題に対処している。また、2003年にはキャリアデザイン学部が法政大学に設置され、(社)日本プロサッカーリーグキャリアサポートセンターとの間に推薦入学に関する協定が締結され、2006年度の入学試験から、Jリーグキャリアサポートセンターが推薦する入学希望者を推薦入試において一定条件でキャリアデザイン学部が受け入れることとなった。

しかしながら、これらの取り組みはまだ始まったばかりであり、まだ多くの問題が残されている。例えば、関口³⁾は、キャリア教育の効果をあげるためには学習者自身の自発的な取り組みが必要であり、「現状を見る限り、まずは、基礎的な学力の向上、学習目標、学習動機、学習技術及び学習習慣の習得を促進することが求められよう。そのためには、学習者の状況を見極めた上でのきめ細かな支援が必要となる(p.133)」⁴⁾と述べ、支援方法として、チューター等の個別支援体制を整備することや、活動を統括してモニタリングする運営組織を設置することを挙げている。筑波大学体育専門学群で開設されている総合演習Ⅰ・Ⅱで実施しているキャリアプランニングの授業でも、受講生の主体性や学習の深まりが不十分であったことが報告された⁵⁾。ここでは、授業に出席して課題を片づけているだけの表面的な学習ではなく、自分の将来の進路に関わる課題に十分自己関与して有意義な学習成果を挙げるために、改善策として、学習のねらいを盛り込みすぎないようにして活動を絞り込み、十分時間をかけて課題に取り組めるようにすること、学習のねらいにそった活動と表面的な活動の違いが見分けられるように具体例や典型例を示すこと等が挙げられた²⁾。

2. 目的

本研究の目的は以下の通りである。①大学にお

けるキャリア教育の現状と、平成12年度から本研究者が実践してきた実践の問題点を踏まえて、平成17年度開講の総合演習Ⅰを改善し、②受講生の学習活動を分析して、体育専攻生のキャリアプランニングに対する取り組みの特徴を把握し、③体育専攻生のキャリア教育プログラムとしての、本実践プログラムの効果を測り、改善点を検討する。

3. キャリアプランニングの授業の改善

1) 職業に関する課題解決学習の前提条件

平成12年度から16年度まで本研究者が実施していた総合演習Ⅰでは、将来つきたいと考えている職業や進路に関して自分が持っている疑問や問題意識を基に課題を設定し、情報収集活動を通じて課題を解決し、その成果を発表していた。この授業では、①自分にとって意味のある課題を設定する力、②課題を解決するための方法を考える力、③課題を解決するために必要な情報や知識を収集する力、④得られた知識や情報を基にして課題に対する答えを導き出す力を身につけることをねらいとしていた。

この授業実践から、職業に関する課題解決学習を行なう際に、受講生が最初に課題を設定することが難しいことが分かった²⁾。受講者の16%が現在の競技生活やトレーニング、自分の専門種目に関する課題を設定しており、教員やスポーツ指導者といった将来の職業に関わる課題も、「いじめをなくすには」「選手の食事とサプリメント」「総合型地域スポーツクラブの現状」等、現時点での興味をもっている事柄が多く、それらの事柄について調べるだけの調べ学習になっていた。また、授業の感想として、「なぜ今から就職のことを考えなければならないのか」という意見が少なからず寄せられたことから、職業に対する関心や職業と自分との関わりが不十分なために、職業に関して自分にとって意味のある課題、将来の見通しをもって現在の生活を改善することにつながるキャリアプランニングの課題を設定することができる状態にないのではないかと思われた。平成17年度の総合演習Ⅰでは、まずは職業に対する関心や、職業と自分自身とのつながりを深めるための活動を行い、将来自分が就きたいと思っている職業に就くという方向づけができてから、現在の自分を見直し、平成18年度の総合演習Ⅱでは、将来に

向けて今できることを考えるキャリアプランニングにつなげる必要があると考えた。

2) キャリアプランニングのプロセス

関口⁶⁾は、従来のキャリア教育では学生の意識変革を促したり心構えを説くことが主であったと指摘し、本来は学生一人一人の発達レベルにあわせた教育を実施してより具体的なプランを立てさせること、そのプランに沿って行動を起こすまでの支援を含むものであると主張している。将来の目標や方向性を決定していない学生を考慮して、関口⁶⁾が提案している発達段階レベルに合わせたキャリア教育は、まずは①積極的態度の教育(狭い世界しか知らない者に、広い世間を知るための心構えを作る)、②職業倫理の教育(自ら身体や頭を動かして働くこと、稼ぐことの大切さや、それに伴う喜びを知る)、③自己理解の教育(自分を反省し、能力・適性の診断を行い、自らの経歴の棚卸しをする)、④職業選択の教育(自分に向けた職業に見当をつけ、深くそれを研究する)に重点をおいたキャリア教育から始め、その後、⑤職業知の教育(世の中にある多様な産業・職業を知り、それらに必要とされる知識、技術の概要を知る)、⑥職業能力の教育(選んだ職業について、それに必要だが自分には足りない専門知識・技能を獲得する)、⑦就職技法の教育(その職業へのスムーズな就職技法を獲得する)へ進むというプロセスで構成されている。

また、「スポーツ選手がスポーツから最大の恩恵を受けられるようにすること」を一つの目的として書かれた『スポーツ選手のためのキャリアプランニング』⁵⁾では、キャリアプランを構成するプロセスとして以下の3つを挙げている。①自己探求プロセス(自分は何を求めているのか、何が好きか、何に興味があるのか、自分の長所・スキルは何か、どんな性格なのか、について考える)、②キャリア探求プロセス(どんな仕事か自分の長所やニーズ、関心、スキル、性格に合っているか、その仕事の求人はあるか、その仕事に就くためにトレーニング等を受ける必要はあるか等について検討し、自分の選択肢を考える)、③キャリア獲得プロセス(自分が選択した分野の仕事に就く具体的な方法を考える)。

関口⁶⁾のキャリア教育も、Pettipasら⁵⁾のキャリアプランニングにも、①自分を知ること、②職業

について知ること、③自分の興味関心に基づいて職業を見ること、④職業が要求する能力や人材の観点から自分を見ること、これらの活動を繰り返して、職業を選択したり、選択した職業に就くために自分がすべきことを考えて実行するプロセスが含まれている。

3) 授業計画

上記を踏まえて4つの改善点を挙げ、総合演習Iの授業を構成した(表1)。

- ①「自分を知る」「職業について知る」「職業と自分を照らし合わせる」という活動を十分に行う。
- ②不明な点や問題点が出てきたら、再度職業について調べたり、自分自身のことを確認する等、①の活動を何度も繰り返せるようにする。
- ③こうした活動を繰り返すことが問題解決学習であり、生きる力の育成につながることを意識させる。
- ④職業に対する関心や態度に個人差があることを踏まえて、職業に関心を持っていないレベルから就職対策を立てるレベルまで、どのレベルからも始められどのレベルまでも進めるようにする。

3. 授業実践

1) 実施期間と受講生

実施期間は、平成17年12月8日から平成18年

2月23日、受講者は251名であった。1年次生のほとんどが履修するため、1年のクラス担任の教員12名がそれぞれの受け持ちクラスの生徒に1、2名程度の科目等履修生を加えたクラスを担当した。各クラスの受講生数は20名～22名とほぼ均等になるように編成した。

2) 受講生の活動：学習者・クラス担任(役)・先生(役)

毎時間、各クラスの受講生から3名をクラス担任(役)として選出し、3人は分担協力して1時間の授業を行なった。クラス担任(役)の受講生には授業の4日前に授業案を渡し、マニュアルにそって指導計画を立てさせた(表2 クラス担任(役)用ワークシート参照)。本学の1授業時間は75分であるが、65分に収まるように時間配分を考えさせた。授業案は、①前回の授業のふりかえり、②今日の授業の準備と概要の説明、③今日の授業の学習活動、④次回の授業までの準備について説明、からなっている。クラス担任(役)の受講生は、交代で授業を進行しながら、他の受講生たちと同様に学習活動も行なった。

授業中の活動は、受講生各自で活動する個人学習と、受講生2人組のペアで行なうペア学習に分かれている。ペア学習の際には、パートナーの先生になったつもりで、先生(役)として互いアドバイスし合うように指示した。本実践で、受講生は

表1 総合演習I キャリアプランニングの授業計画

時間	授業の概要	
1	オリエンテーション	「キャリア」とは、仕事上の経歴のことではなく、いかに生きるか・いかに生きてきたかを示す指標である。本授業では、これまでのスポーツ選手としてのキャリアやそこで身につけてきたライフスキルを、これからどうやって卒業後の人生に繋げていくかを考えていく。
2	自分を知る	これまでの人生で自分が身につけてきた能力や関心、性格を振り返り、どのように役に立つか考える。やりがい・価値観チェックシートを使って、自分のやりがいと価値観を確認する。
3	職業について知る	自分の能力、関心、性格、やりがい、価値観を踏まえて、自分に合った職業を探す。
4	職業と自分を照らし合わせる	自分に合っていると思う職業について、さらに詳しく仕事内容、就職後の生活、採用条件などについて調べ、再度確認する。
5		職業に関して今の自分にとって解決が難しいと思われる点を把握する。
6	キャリアプランニングのレベルを把握する	職業選択、就職の現状、就職後の生活に関して、自分にとって解決すべき課題は何かを把握する。
7		自分のキャリアプランニングの進行状況を把握する。職業選択、就職の現状、就職後の生活に関する課題を、どこまで解決できているかを確認する。
8	問題解決学習として活動をまとめる	キャリアプランニングの活動を、課題・方針(目的)―調査活動(方法)―調査結果(結果)―調査から分かったこと(考察)―意思決定あるいは今後の課題(結論)という、問題解決学習のサイクルでまとめる。
9	発表	①発表(1人3分)。②クラスメートの発表を聞き、①問題解決学習ができていたか、②情報収集活動は十分だったか、③今後の課題を具体的に立てることができたかを、それぞれ5点満点で評価する。

学習者としてキャリアプランニングの学習活動を行なうだけでなく、少なくとも1回はクラス担任(役)として授業の進行を行い、毎回の授業でペアになっているパートナーの先生(役)としてアドバイスをを行っていた。

3) 世話人教員・クラス担当教員の役割

世話人教員(本研究者)は、授業当日の昼休みにその日の授業を担当する36名のクラス担任(役)の受講生を集め、授業案や授業の進め方などについて説明した。授業中は、クラス担当教員が受講生のクラス担任(役)をサポートした。授業終了後、クラス担当教員は、授業中や課外の活動で受講生が記入したワークシートを世話人教員に提出し、世話人教員は、ワークシートを通じて授業の進行状況をモニターした。

4) 学習活動とワークシート

クラス担任(役)の受講生が提出するワークシート(表2)の他に、受講生は、3種類のワークシートを用いて学習活動を進めた(表3)。授業の最後に配布され、次の授業までに記入して授業に持参する宿題ワークシート、授業中のペアでの活動について記入するペア用のワークシート、授業中に個人で記入する個人用ワークシートである。まず、授業前までに、宿題ワークシートにしたがって授業中に検討するための材料をそろえたり下調べを

する。授業中に宿題ワークシートに記入してきたことをペア同士で報告しあい、アドバイスする。ペアで話し合った結果やパートナーに対するアドバイスは、授業中にペア用ワークシートに記入する。やりがいや価値観のチェック等、各自で行なう学習活動や、ペアで話し合った結果を基にした自己評価、次の活動計画は、授業中に個人用ワークシートに記入する。授業中に作成した活動計画やパートナーからのアドバイスに従って、授業後、課外に活動を行ない、その結果を宿題ワークシートに記入して、次の授業に持参する。

受講生が授業に持参した宿題ワークシートと、授業中に記入したペア用ワークシート、個人用ワークシートは、毎時間の授業の最後に回収され、世話人教員(本研究者)のところに集められた。世話人教員は、回収されたワークシートの回答を分類・集計するなどして受講生の学習活動を資料にまとめ、次の授業で受講生にフィードバックした。回収したワークシートも次の授業で受講生に返却され、受講生は返却されたワークシートと情報収集活動で得られた資料と一緒に各自のポートフォリオにまとめていた。

4. 職業に関する体育専門学群生の意識とキャリアプランニングの効果

1) 将来の職業の志望

表2 クラス担任(役)ワークシート 第3回授業用

- ①授業中の活動を確認して、説明のための文章や指導する時の言葉を書いておく。
②活動の時間配分を決める(計65分)
③活動がスムーズに進むように対処法や指導上の工夫を考えておく。

活動	時間	概要と注意点
前回の授業を振り返る		配布資料を参照し、第2回授業を思い出させて質問。指名した生徒の回答にしっかり反応する(言っている事を理解する。不明なら聞き返す。理解できたということをしっかり伝える(「なるほど、…なんですね」)。以上の活動を行なうために、説明文と指導の言葉を書く。
今日の授業の準備		ペアで活動することを確認する。前回と同じペアで座らせる。前回欠席者をペアに入れる。以下に、ペアの確認と欠席者をペアに入れる時の説明文を書く。
今日の活動の概要説明		今日は「自分について知る」活動。1)宿題ワークシートを出してスポーツや競技を通じて身につけた能力、関心、性格について考え、2)ワークシートNo2で自分のやりがいを知る、3)次回の宿題について説明する、というように授業の流れを説明する説明文を書く。
身につけてきた能力、関心、性格について考える		スポーツや競技を通じて身につけてきた能力、関心、性格について考えてみて、思ったことを、パートナーの先生(役)に報告する。先生(役)はそれに対して受け答える。総合的な学習での先生の指導は「支援」が中心なので、配布資料にある先生の支援の仕方をよく読んでから始める。以下に説明文を書く。
自分のやりがいを知る		ワークシートNo2の全項目読んで、自分がやりがいを感じる項目をチェックする。最低5つは選んで順位をつけ、選択理由を書く。残り時間を確認し、時間がなければ途中でやめて、休み中の宿題の説明に移る。以下に、ワークシートNo2のやり方の説明と作業を中断させる時の説明文を書く。
次の授業の準備について説明		1)次のクラス担任(役)3人を決める。2)宿題について説明。①ワークシートで自分のやりがいと価値観を確認、②やりがいと価値観に合った職業を探す、③インターネット、本、人に聞く等で職業探索する、④探索した職業に関する情報は、目付をつけてポートフォリオに入れる、5)活動の結果をワークシートにまとめる。以下に説明文を書く。

表3 キャリアプランニングのためのワークシート

宿題ワークシート(前回授業の最後に配布)	授業	授業中に行なうワークシート
	1.オリエンテーション	個人用「就きたい職業・興味のある職業とその職業について知っていること」「今キャリアプランニングを行なうことについてどう思うか」
「スポーツや競技生活を通じて身につけてきた能力、関心、性格はどのように役に立つか」	2.自分を知る	個人用「やりがいチェックシート」「価値観チェックシート」
「冬休み中の職業探索活動の報告シート」	3.職業について知る	ペア用「パートナーの職業探索活動の評価と今後必要な調査についてのアドバイス」
「パートナーにアドバイスされた調査の実施報告」	4. 5. 職業と自分を照らし合わせる	ペア用「パートナーの職業探索活動の評価と今後必要な調査についてのアドバイス」、個人用「職業探索活動の自己評価：(表5の質問)」
「パートナーにアドバイスされた調査の実施報告」		個人用「受講生の回答ケース1～8を読んでキャリアプランニングで取り組む課題について考える」、ペア用「今後必要な調査についてのアドバイス」
「パートナーにアドバイスされた調査の実施報告」	6. 7. キャリアプランニングのレベルを把握する	個人用「調査結果のまとめ：興味のある職業の仕事内容・採用状況・就職後の生活」、ペア用「就職まで・就職後の問題の把握や対応策を考えるために必要な調査についてのアドバイス」
「就職まで・就職後の問題の把握や対応策を考えるため調査の結果報告」		個人用「キャリアプランニングのレベルを把握する(表7の質問)」、ペア用「現時点で解決できているキャリアプランニングの課題と今後必要な調査」
「調査結果の報告」	8. 問題解決学習として活動をまとめる	個人用「発表原稿の作成(表6)」、「配布資料の作成」
「発表原稿」「配布資料」	9. 発表	個人用「発表の評価：情報収集活動・問題解決学習・今後の目標設定の観点から」

第1回授業の全体オリエンテーションにおいて、「将来就きたいと思っている職業、なければ興味を持っている職業」、「就きたいと思ったあるいは興味をもった理由」、「その職業につくために必要だと思う能力・知識・経験」を尋ねた。回答のあった232名中、就きたいと思っている職業名を挙げることができた者は157名(68%)、就きたい職業は分からないが興味のある職業を挙げた者は72名(31%)、いずれもまだないと答えた者は3名(1%)であった。

表4は、平成17年度3学期開講の総合演習Ⅰに続き平成18年度1学期に開講された総合演習Ⅱを最後まで履修した受講生187名について、受講生が総合演習Ⅰのオリエンテーションの時点で挙げた職業について、詳しく分類した結果である。将来就きたいあるいは関心がある職業として、一つの職業を挙げた者は全体の半数であった。残りの半数は、複数の職業を挙げていたり、職業名として把握していない等、将来の進路はまだ明確になっていないと言える。また、「プロのスポーツ選手を目指している」と答えた11名は、全員引退後のセカンドキャリアを回答することができたが、セカンドキャリアとして職業名を挙げたのは半数であった。

職種としては、教員を挙げている者が多く、選

択肢の一つとして挙げている者も含めて全体の47%を占めていた。

2) キャリア選択のための活動とキャリアプランニングのレベル

(1) 職業探索のために「自分を知る」「職業を知る」

第2回、第3回授業で、自分のやりがいと価値観をチェックし、自分に合った仕事を探す活動を行なった。その中で、職業に関する知識が不十分なために不適切な判断を下している以下のようなケースが見受けられた。①十分調べずに下した職業決定によってキャリア探索が影響されているケース(職業と価値観の照合についての受講生の回答例：「ずっと教師を目指してきたので、価値観は合っていると思う」)、②職業に対するイメージがあいまいなために、広く捉えて自分の価値観と合っていると誤解しているケース(「教師は人にもものを教える仕事なので、人にもものを教えたいという自分の価値観に合っている」)、③同じ職業でも仕事内容や環境が異なることを理解していないために、その職に就きさえすれば自分の望む仕事ができると誤解しているケース(「体育教師になれば自分の専門種目を部活動で指導できるので、自分のやりがいに合っている」)。

一方、職業と自分とを照らし合わせて確認する

中で、新たな課題に気づいて取り組む受講生も出て来た。例えば、自分のやりがいや価値観、興味関心等のすべてが問題なく適合する職業はないことに気づく、自分のやりがいや価値観、興味関心の優先順位を決めて職業選択の条件を緩和しなければならないことに気づく、希望する職業の要求に対応できるように自分に足りないところを補う努力をする覚悟を決めなければならないことに気づいた受講生たちである。

(2) 自分の課題に気づいて再度「自分を知る」「職業を知る」

第4回授業では、前述の、職業に関する知識が不十分なために不適切な判断を下しているケースと、新たな課題に気づいたケースの両方を受講生全員に示した。そして、各自で自分の活動を振り返って、「職業と自分とのマッチングが判断できるくらい十分に職業について調べているか」「やりがいや価値観の優先順位を決めるなどして最善の選択ができる方法を考えているか」を確認させた。その結果、受講生の回答から、受講生のキャリアプランニングのレベルは大きく分けて、表5に示した6つのレベルにあることが確認できた。全ての受講生が、「自分について知る」「職業について知る」「職業と自分を照らし合わせて職業を選択する」活動を行なっているが、表5のレベル1のケースのように、キャリアプランニングの必要性を感じていなかったり、あるいは、レベル2のように、以前から就きたいと思っている職業が

あるために職業選択の課題は解決していると考えて、活動はしているが、実際には職業選択という課題に取り組んでいないケースもあった。

一方、「自分について知る」「職業について知る」「職業と自分を照らし合わせて職業を選択する」という3つのプロセスを経て職業選択の課題に取り組んだ結果、それぞれの活動の重要性に気づいて、再度その活動に取り組んでいる受講生もいることが分かった。表5から分かるように、レベル4のケースでは、「もっと自分自身のことを理解していなければ、実際に就いてやりがいを感じられるか分からない」と思い、「本当にしたいことは何か、どんなことが大事なことなのか」等自分の考えを明確にしようとしている。つまり、職業を選択するにはもっと「自分について知る」必要性があると感じて、再度その活動に取り組んでいる。レベル5のケースでは、ペアで学習しているパートナーが調べている職業にも興味を持ったことで、自分が偏見をもって職業を見ている可能性があることに気づき、意識してより広い範囲で職業を探索し直している(表5参照；レベル5の①)。また、自分自身について新たな発見があったことから、本当に自分に合った職業かどうかを判断するために、職業についてさらに深く調べているケースもあった(表5参照；レベル5の②)。いずれのケースも、活動の過程で広くあるいは詳しく「職業について知る」必要性に気づき、もう一度職業について調べ直している。レベル6のケースでは、自

表4 体育専門学群1年次生のキャリアプランニング(演習開始時)

n=187

職業を1つ挙げている	95名 (51%)	複数の職業を挙げている	46名 (24%)	仕事の概要や領域を挙げている	20名 (11%)	仕事の内容を特定していない	15名 (8%)	プロ選手(セカンドキャリア)	11名 (6%)
教員(高校教員17、中学校教員1、小学校教員1,未記入49)	68	教員が主 トレーナーが主	16	知識学問領域(バイオメカニクス,健康科学等)を活かす仕事	5	スポーツ関連企業・スポーツ・専門種目に関する仕事	12	教員 指導者	4 3
トレーナー	12	その他(警察官、市職員、救急救命士、ジャーナリスト、劇団員、インストラクター)	6	スポーツビジネス・スポーツイベントの運営・チームのサポート	4	企業 努力しただけ給料が変わる仕事	2	メディア関係 実業団の企業	2 1
スポーツ用品メーカー	5			専門種目の普及	4			その他(行政書士・予備校講師)	1
研究職	2								
その他(インストラクター、上級公務員、柔道整復師、パン屋、社会福祉士、サッカーエージェント、警察官、パイロット各1)	8	複数の選択肢を並列	19	子ども・高齢者・障害者・地域スポーツのための仕事 指導者	5 2				

分自身と職業を照らし合わせて将来就きたいと思う職業を決定した後も、実際にその職業に就くために必要なことについて調べたり(表5参照; レベル6の①)、予測できない今後の状況に備えて、できるだけ具体的なイメージが持てるようにより詳しい情報を集めている(表5参照; レベル6の②)。

以上のことから、「自分を知り」「職業について知り」「自分にあった職業を探索する」という活動を行なった結果、当初改善点に挙げていた、活動を通じて検討すべき課題に気づき、職業や自分について知る活動を再度繰り返させることができた。しかしながら一方で、同じ活動をしていながら、課題に取り組む重要性や必要性を感じていな

い受講生もいたため、第5回授業では受講生全員に、受講生の回答から抽出した事例として、表5に示した6つのレベルに対応した8つの事例を示し、各事例の問題点やそれに対するアドバイス、各事例から学べることは何かを受講生に考えさせた。それぞれのレベルに進んでいる者の事例を提示することによって、皆がただ同じ活動しているのではなく、それぞれが解決すべき課題を見つけ、その課題を解決するために活動していることに気づかせるためである。

第6回授業では、表5に示した8つの回答例に照らして自分の職業探索のレベルを確認し、自分の段階に応じて、自分が取り組むべき課題は何か、その課題を解決するために必要な活動は何かを確

表5 自己理解・職業理解・職業選択の活動を行った時点での受講生のキャリアプランニングのレベルと回答例

キャリアプランニングのレベル	Step1 自分について知る：自分のやりがい、価値観、価値観の優先順位を把握しているか	Step2 職業について知る：やりがいや価値観に合っているかを判断できるくらいに職業について調べているか	Step3 広い視点で自分と職業を照合する：やりがいや価値観により合っているという条件で、広い範囲から職業を探しているか	職業選択：自分と職業について知り、照合して最良の解決を得る問題解決学習になっているか
1. キャリアプランニングの必要性を認識していない	自分はやるべきところでは全ての力を放出するタイプだということが把握できている。		探していない。まだ大学1年で、社会を広く知らないもので、そんなところは探せていない。	No. 職については実感も湧かないし、3、4年になってからと思う。
2. 就きたい職業と自分の適性を確認していない	好きなスポーツをずっと続けられるというのはこの上ない幸せだから。	あまり調べていないと思う。周りから言われる程度しか知識がない。	自分に合った職業は今一つしかないと思う。興味があるものは他にないから。	Yes. 漠然となりたいと思っていたが、話を聞いてさらになりたいと思った。
3. 価値観、やりがい、能力、興味、興味を合っていることを確認		ATの日記から、人の役立ち、自分の判断が重要な自立的な職業で、やりがい合っていると思う。	人の役に立つ職業は他にもあるが、自分の技術や興味から考えるとAT。やりがいに合わせて興味のないものを職業にするのは無理。	
4. 最適な職業探索のために、重要な価値観ややりがいを把握し直している	自分が何を一番考えているのかが分らなくなってきた。興味のある職業だけを調べ、職業に自分の価値観をあわせてしまっている。		やりたい職業にこだわりすぎて視点が狭くなっている。本当に自分の価値観に合った職業を、分野にとらわれずに調べる必要があると思う。	Yes. 自分と職業の事を考えるうちに、理想は自分でいうように考えがちだということ、本当に大事なやりがいや価値観を決めることが大切だと分かった。
5. 自分と職業について新しい発見があり、問題解決学習のサイクルを繰り返している	①	色々な職業を見ていきたい。友達調べていた職業の方が、やりがいがありそうだったから。	興味のなかった仕事も調べてみた方がいいと思った。偏見で職業を見ていることが多いから。	
	②今まで気づいていなかった自分の価値観に気づく新しい発見もあった。	不十分。少ない時間で調べる工夫をしなければならぬと思う。	広い範囲から探せていると思う。ピックアップしている職業もジャンルがいるいる。	No. 仕事内容をイメージできるような情報を集めたい。自分について考え、見え始めた気がする。
6. 優先順位を明確にして職業選択し、不確定な将来にも対応できるように情報収集している	①合わない部分と、補う魅力が発見できた。第一の価値観が優先できれば、他は犠牲になってもらってよかった。	価値観と合っている点と合わない点について調べた。学ぶべき事、教員採用に必要な力等も分かった。		
	②練習も良い環境ででき仕事も精一杯できることを前提に、本当に自分がつきたい職業を調べることができている。	両立しながら選手を続けるイメージが描け、頑張る意欲が湧くので大丈夫だと思う。もっと情報を集めたい。		Yes. だが、今後、選手を続けたくなくなるかもしれないし、違うことに興味を持つかもしれないので、まだまだ多くのことを調べたい。

注)各レベルの特徴が把握しやすいように、各レベルの特徴を良く表している回答のみを表中に記した。

認させて、引き続き職業選択の活動を進めさせた。

(3) 課題を解決して次の課題に進む

第7回授業では、職業を選択するために進めてきた自分の活動を最初から振り返り、それらの活動がどのような課題を解決する活動になっていたかを考えさせた。その結果、受講生の回答から、「自分を知る」「職業を知る」「職業と自分を照らし合わせる」活動を行ない、情報を得ていても、得られた情報を基に課題を解決できないまま、次の課題に取り組んでいる受講生がいることが分かった。

表6の回答例①と②は、ともに自分が何をしたいのか把握できないまま、職業について調べる活動に進んでいる。様々な職業について調べながら興味を持ってそうな職業を探しているが、興味を持ってそうな職業があっても、その職業について調べたところ予想外に実際の仕事や就職が難しいことが分かったというような場合は、自分がその仕事をどのくらいやりたいと思っているのかによって、その障害を越えることを次の課題にするか、あるいは、あきらめて別の仕事を探すことを次の課題にすることができる。しかし、回答例①で述べられているように、自分が何をしたいのかが把握できていないので決めることができない。回答例②は、自分が何をしたいのかを判断基準にせず、様々な職業を調べて自分にできるかどうかを検討している。

回答例③と④は、自分が何をしたいのかをある程度把握している。しかし、自分の就きたい職業については実はよく分かっていない。つまり、「自分について知る」「職業について知る」活動を行っているが、職業について調べた結果、職業と自分を照らし合わせて、やはりその職業に就きたいと思うのかが十分確認できていない。回答例③は、職業について調べた後も、その職業につきたいと「漠然と」思っていた状態が、「いいかなと思っっている」状態になっただけである。決めることができていないが、「ある程度決まっているので、詳しく調べる」と述べている。実際にはこの状態は、漠然と決めていた職業について調べ始めた最初の状態から進展しているとは言えない。回答例④は、運動を教えられる職業に就きたいという希望から、教員について調べているが、教員について調べた結果、教える職業として結局教員がいいと思ったのか確認することも、運動を教える他の職業と比較することもなく、教員採用試験や自分に欠けている能力について検討している。

これらの回答例のように、課題が解決できないまま次の活動に進んでいる理由として、「自分を知る」「職業を知る」という課題を解決するために集めた情報を適切に解釈できていないこと、ここで得られた情報を基に確認あるいは判断するための自分の判断基準をもっていないことが考えられる。

表6 未解決課題を残したまま調査を進めている例

質問項目		授業前、将来の職業について考えていたこと	授業前の職業に関する知識	授業初めの調査の方針	調査活動に伴う変化	今の課題
自分が何をしたいのか「自分について知る」課題が未解決	回答例①	なりたい職業は決まらなかった。スポーツや自分の競技に関する職業、教師くらい	ほとんど分かっていない。自分が見たり想像するくらいのことしか分からなかった。	なるべく広範囲から、興味ももてたり、やりがい等が合うような職種を探す。	途中からは、自分がそれにつく可能性のあるものを調べた。	将来何をしたいのかがまだ決まっていないため、職業も決めることができていない。
	回答例②	就職活動や大学で経験を積めば、体育・スポーツ関係の職につけるだろうと考えていた。	仕事内容や資格について、一般的な知識・理解をもっている程度	スポーツ関連のどんな仕事があるか、仕事内容を調べる。	理想と現実のギャップ、求められる能力や自分に足りないものを調べるようになった。	職についてから後の自分にとっての課題や対応策を考えること。
職業が自分に合っているのか「自分と職業を照らし合わせる」活動が不十分	回答例③	漠然とその職業につきたいと思っていた。	一般的な知識だけ。自分で勝手に理想を描いていた部分もある。	その仕事についてできるだけ詳しく、具体的なことを知る。	やはり最初に思っていた仕事がいいかなと思っっている。	ある程度決まっているので、変わらず詳しく調べる。
	回答例④	色々なことを考えて、体育教師等、運動を教えられる職業につきたいと思っていた。	職業についてはよく分からず、運動を教えられるので体育教師と思っっていた。	教師の仕事内容や教採募集要項等を調べる。	何が難題か、これか何が必要かが分かるようになった。	自分に欠けているスキル、知識、理論を身につけていくことを考える

(4) キャリア選択のための活動を問題解決学習として捉え直す

第8回授業では第9回の発表会に向けて、表7に示した様式に従って、これまでの活動を職業選択に関する問題解決学習のプロセスの繰り返しとして整理させた。情報収集活動は全員が行なっているので、職業について分かったことはどの受講者も問題なく発表することはできる。しかし、これまで述べてきたように、職業選択に関する問題解決の活動としては問題のあるケースが見受けられていた。情報収集活動していても、キャリアプランニングを行う必要性を感じていなかったり、活動を通じて自分が取り組むべき課題を見つけることができなかつたり、課題を解決するために必要な情報を収集することができなかつたり、得られた情報を基にして課題に対する回答を考えるとできないといったことである。

そこで、これまでの活動を報告する発表会の原稿を、表7に示したように、課題の把握—課題を解決するための情報収集—収集した情報—情報から分かったこと—課題に対する答えというように、目的(課題)—方法(情報収集方法)—結果(情報)—考察—結論(解答)のつながりを意識して活

動を整理し、さらに、最初の課題解決活動を通じて出て来た次の課題に取り組むというように、問題解決活動のサイクルを意識させることにした。このことによって、自分の活動が課題解決学習のサイクルとして整理でき、課題解決に問題がある場合は、課題、情報収集方法、情報の分析、解答のいずれに問題があるのかが確認できると考えた。また、この様式にしたがって活動を整理すると、それがそのまま原稿になるという利点もある。表8は、受講生の発表原稿の例である。

4) 総合演習 I の効果

(1) 受講生が取り組んでいた課題解決学習

第9回の授業終了後に筆記試験を行なった。設問の中で、「総合演習 I の授業で最初に設定した課題」「その課題を解決するために行なった情報収集活動」「情報収集活動の結果得られた情報」「情報に基づいて出した課題に対する答え」「最初に立てた課題に答えた後で取り組んだ次の課題」について尋ね、「適切な課題が立てられなかったと思う場合は、その原因とどんな課題を立てればよかったのか」を、「課題に対する答えが出せなかった場合はその原因」についても述べさせた。回答

表7 発表原稿の構成

1.	総合演習の授業前、 将来の職業について … (C1) と思っていました。 C1に関して分かっていたことは … (B1) でした。
2.	総合演習の授業が始まり、 まず初めに … (A 2) するために … (B 2) について …して(…から、を使って、)調べました。 <注：どうやって調べたかを述べる>
3.	調べた結果は、配布資料に示す通りです。 ①… <注：調査結果の中でも、特にC3の結論を導き出す基になった情報を挙げる> ②… ③… … (B 3) という情報が得られたので A2については … (C 3) だということが分かりました(と言えます)。 <注：3の課題解決から、次の課題解決のための調査に進んだ場合、4へ。3の問題解決活動で終わった場合は、5へ。4の後、さらに別の課題解決学習に進んだ場合は、4と同じ形式で続ける。>
4.	そこで次に、 … (A 4) するために … (B 4) について…して調べました 調べた結果は、配布資料に示す通りです。 … (B 4') という情報が得られたので A 4については … (C 4) だということが分かりました(と言えます)。
5.	総合演習の授業を終えて、 自分にとっての今後の課題は、… (A5) です。 課題を解決するために、… (C5) していこうと思います。 <できるだけ具体的に、何をするか、行動目標を挙げる> <注：ABCの記号：Aは設定した課題や目的、Bは調査結果や情報、調査項目、Cは、決めたことや導き出した結論を示す。>

のあった186名について分析した結果、本実践を通じて受講生が行っていた課題解決学習は、表9のように分類することができた。

「自分を知る」「職業について知る」「職業と自分を照らし合わせる」活動を行なった総合演習Ⅰで、これらの活動を通じて最終的に職業を選択する課題に取り組めた者は全体の14%、さらに、選択した職業に就くための準備の課題に取り組めた者は全体の23%であった。就きたい職業を複数の選択肢から一つに絞り込んだり興味を持っている職業に就くことを決めるといった、職業を選択する段階には至らず、職業探索する段階で終わった者は63%を占めていた。職業探索に取り組んでいた者のうち、特定の職業(11%)あるいは複数の職業(15%)が自分に合っているかどうかを確認する、自分と職業を照らし合わせる課題に取り組んでいた者が合わせて26%であった。しかしながら、残りの37%は、職業について知るだけの調べ学習に終わっていた。

(2) 受講生が認識していた授業の効果

次に、受講生自身が総合演習Ⅰの効果をどのように感じていたかを調べるために、筆記試験の中の「総合演習Ⅰの活動によって自分にどんな変化があったか」という設問に対する受講生の回答を分類した(表10)。演習を通して得られた変化と

して、最も多くの受講生(36%)が挙げていたことは、「特定の職業(興味関心を持っている職業)の仕事についての知識が増えた」ことであった。宿題として出されていた課題のほとんどが職業に関して調べることであったため、その活動の直接的な成果として興味を持って調べた職業に関する知識が増えたことを挙げたと考えられる。

次に多かったのは、「今から将来のことを考えるべきだと思うようになった」ということである(25%)。「将来に向けて計画や準備が必要だと分かった」という者(15%)、「自分に就職に対する心構えができていないことに気づいた」と言う者もいた(11%)。総合演習Ⅰは1年次生対象の授業であり、例年、「就職のことは3、4年になってから考えればいい。なぜ1年の時から考えなければならぬのか」という不満が聞かれる。総合演習Ⅰによる変化として、就職に対する心構えや将来に向けての取り組みの必要性がこれだけ多くの受講生から挙げられたことは、授業の成果として評価できると考える。

3番目に多かった回答は、「これから何をやらなければならないかが分かった」(20%)、続いて、「課題に自主的主体的に取り組めるようになった」(19%)であった。「職業と、自分のやりがいや価値観が合っていることが分かった」(17%)、「職

表8 発表原稿の例

1. 総合演習の授業前、将来の職業について	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="485 1244 912 1263">栄養士あたりがいい</td> <td data-bbox="916 1244 1229 1263">とっていました。</td> </tr> <tr> <td data-bbox="485 1269 912 1288">漠然として分かっていません</td> <td data-bbox="916 1269 1229 1288">でした。</td> </tr> <tr> <td data-bbox="485 1294 912 1363">調べてみると、色々な面で自分に向いていないことがそこで、他の職業を調べていくうちに、スポーツクラブの指導員に興味を持ちました。</td> <td data-bbox="916 1294 1229 1363">分かりました。</td> </tr> </table>	栄養士あたりがいい	とっていました。	漠然として分かっていません	でした。	調べてみると、色々な面で自分に向いていないことがそこで、他の職業を調べていくうちに、スポーツクラブの指導員に興味を持ちました。	分かりました。
栄養士あたりがいい	とっていました。						
漠然として分かっていません	でした。						
調べてみると、色々な面で自分に向いていないことがそこで、他の職業を調べていくうちに、スポーツクラブの指導員に興味を持ちました。	分かりました。						
2. そこで次に、 スポーツクラブ指導員について	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="485 1387 912 1445">詳しく知り、自分の価値観ややりがいに合っているかどうか、またどのように合っているか確かめる</td> <td data-bbox="916 1387 1229 1445">ために</td> </tr> <tr> <td data-bbox="485 1450 912 1474">詳しい仕事内容、必要な資格と必要な能力</td> <td data-bbox="916 1450 1229 1474">について</td> </tr> </table> <p>インターネットと本を使って調べました。</p>	詳しく知り、自分の価値観ややりがいに合っているかどうか、またどのように合っているか確かめる	ために	詳しい仕事内容、必要な資格と必要な能力	について		
詳しく知り、自分の価値観ややりがいに合っているかどうか、またどのように合っているか確かめる	ために						
詳しい仕事内容、必要な資格と必要な能力	について						
3. 調べた結果は、配布資料に示す通りです。(省略) 必要な能力については、 価値観についても 資格については	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="485 1497 912 1555">これまでのスポーツ経験を活かせることや、大学の授業の内容でも指導員になるための知識を取り入れることができるということ</td> <td data-bbox="916 1497 1229 1555"></td> </tr> <tr> <td data-bbox="485 1561 912 1584">スポーツに一生関わっていききたい、人の役に立ちつつ自分も成長したいという自分の価値観に合っている</td> <td data-bbox="916 1561 1229 1584"></td> </tr> <tr> <td data-bbox="485 1590 912 1647">講習の科目も、自分の学びたい分野であったり得意としている分野であり、スポーツの総合的な能力が問われるところも自分にとってプラス</td> <td data-bbox="916 1590 1229 1647">だということが分かりました。</td> </tr> </table>	これまでのスポーツ経験を活かせることや、大学の授業の内容でも指導員になるための知識を取り入れることができるということ		スポーツに一生関わっていききたい、人の役に立ちつつ自分も成長したいという自分の価値観に合っている		講習の科目も、自分の学びたい分野であったり得意としている分野であり、スポーツの総合的な能力が問われるところも自分にとってプラス	だということが分かりました。
これまでのスポーツ経験を活かせることや、大学の授業の内容でも指導員になるための知識を取り入れることができるということ							
スポーツに一生関わっていききたい、人の役に立ちつつ自分も成長したいという自分の価値観に合っている							
講習の科目も、自分の学びたい分野であったり得意としている分野であり、スポーツの総合的な能力が問われるところも自分にとってプラス	だということが分かりました。						
5. 総合演習の授業を終えて、 自分にとっての今後の課題は、 課題を解決するために、	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="485 1671 912 1729">多くある資格の中から自分に本当に適している資格を見極めることと、就職後の生活について情報を得ること、それらを基に大学生活で何をすべきかを考えること</td> <td data-bbox="916 1671 1229 1729">です。</td> </tr> <tr> <td data-bbox="485 1734 912 1758">マネジメント実習や、指導員として活動している人と会う機会を活用し、よりリアルな話を聞くことを</td> <td data-bbox="916 1734 1229 1758">していこうと思います。</td> </tr> </table>	多くある資格の中から自分に本当に適している資格を見極めることと、就職後の生活について情報を得ること、それらを基に大学生活で何をすべきかを考えること	です。	マネジメント実習や、指導員として活動している人と会う機会を活用し、よりリアルな話を聞くことを	していこうと思います。		
多くある資格の中から自分に本当に適している資格を見極めることと、就職後の生活について情報を得ること、それらを基に大学生活で何をすべきかを考えること	です。						
マネジメント実習や、指導員として活動している人と会う機会を活用し、よりリアルな話を聞くことを	していこうと思います。						

表9 受講生が行った課題解決学習

職業探索課題	63%	興味を持ってそうな職業を探す	6 (3%)
		興味を持っているいくつかの職業について知る	12 (6%)
		興味を持っている特定の職業について知る	52 (28%)
		最初に興味を持っていた特定の職業が自分に合っているか考える	20 (11%)
		最初に興味を持っていた職業以外で、合っていそうな職業があるかどうか考える	27 (15%)
職業選択課題	14%	自分に合っていると思った特定の職業に進路決定していいかを考える	13 (7%)
		自分に合っていると思った複数の職業のうち、どの職業に進路決定するのか考える	5 (3%)
		自分に合っていない点や難点が残っている職業に、進路決定する覚悟を決める	9 (5%)
就職準備課題	23%	進路決定した職業に就くにはどうしたらいいのか(条件・プロセス)を知る	29 (16%)
		進路決定した職業に就くには、自分は何をしたらいいのか(準備・計画)を考える	7 (4%)
		進路決定した職業に就いた後の自分の仕事や生活について知る	6 (3%)
		進路決定した職業に就いた後の仕事や生活のために、自分は何をしたらいいのか(準備・計画)を考える	0 (0%)

表10 総合演習Iを通じて得られた変化(受講生186名の回答)

		受講生の回答の分類		人数	%	コメント数	%
自己理解	自分の価値観ややりがいが分かった	3	2%	97	17%	157	27%
	自分の能力や性格、新たな可能性に気づいた	20	11%				
	自分の志望動機・意志が確認できた	28	15%				
	就職に対する心構えができていないことに気づいた	20	11%				
	将来の自分、仕事をしている自分がイメージできた	24	13%				
	自分について知ることの重要性に気づいた	2	1%				
職業理解	様々な職業の仕事についての知識が得られた	25	13%	157	27%		
	特定の職業の仕事について知識が得られた	67	36%				
	採用条件や採用試験のことが分かった	5	3%				
	就職してからの生活の様子が分かった	7	4%				
	特定の職業に就職するのが難しいことが分かった	16	9%				
	就職するということ・就職をめぐる現実の厳しさが分かった	7	4%				
	職業後のプロとしての責任・厳しさが分かった	18	10%				
職業についてよく知ることの重要性が分かった	12	6%					
適性	特定の職業と自分の価値観・やりがいが合っていることが分かった	31	17%	108	19%		
	特定の職業と自分の能力・経験が合っていることが分かった	32	17%				
	自分に欠けている能力や必要な能力が分かった	32	17%				
	職業と自分を照らし合わせることの重要性が分かった	13	7%				
課題解決	課題解決を繰り返していく必要性・重要性が分かった	22	12%	84	15%		
	課題解決サイクルの方法を身につけることができた	13	7%				
	課題に自主的・主体的に取り組めるようになった	35	19%				
	問題について考えるようになった/考えることの重要性が分かった	14	8%				
将来計画	今から将来のことを考えるべきだと分かった	47	25%	112	20%		
	将来に向けて計画・準備が必要だと分かった	27	15%				
	これから何をやらなければならないかが分かった	38	20%				
その他	自分の意見を述べる力がついた	6	3%	13	2%		
	情報収集の方法やスキルを身につけた	7	4%				
	人と関わることの重要性が分かった	2	1%				
				計	186名	計	571

業と、自分の能力や経験が合っていることが分かった」(17%)、「自分に欠けている能力や必要な能力が分かった」(17%)であった。職業と自分を照らし合わせる活動を行なった結果、その成果

として職業に対する適性や自分に欠けている能力が分かり、また、必要な能力を身につけるために何をしなければならぬかが分かってきたと言える。

「自分を知る」「職業について知る」「職業と自分を照らし合わせる」活動を行い、例えば「職業についての知識が増えた」というように、受講生は活動の直接的な成果を感じているが、その活動を行うことの重要性を感じている受講生は少なかった（「自分について知ることの重要性」1%、「職業について知ることの重要性」6%、「職業と自分を照らし合わせることの重要性」7%）。一方で、「課題解決を繰り返していく必要性・重要性が分かった」と言う受講生が12%おり、これらの受講生は、「自分を知る」「職業について知る」「職業と自分を照らし合わせる」活動を通じて課題を解決しただけでなく、新たな課題に対応してまたこれらの活動を繰り返すというサイクルを経験し、このサイクルを繰り返すことによってキャリアプランニングが進んでいくことが実感できたと推測できる。反対に、このレベルに達しなかった受講生は、活動を同じように行なっているながら、活動の直接的な結果は実感できても、得られた結果によって自分の課題解決がどのように進んだのかという実感は得られなかったのではないと思われる。

(3) 「自己理解」「職業理解」のレベルの違い

「総合演習Ⅰを通じて得られたこと」についての受講生の回答をさらにまとめると、表10に示したように、コメント数の比は、「自己理解の変化」17%、「職業理解の深まり」27%、「自分の職業適性の理解」19%、「問題解決への取り組み」15%、「将来設計の必要性の自覚」20%、「その他」2%に分けられる。職業理解に関する記述がやや多いが、総合演習Ⅰの構成要素「自分を知る」「職業について知る」「職業と自分を照らし合わせる」活動のいずれも効果があったと認められていると言えるだろう。

また、「自己理解」「職業理解」「自分の職業適性」について見てみると、受講生によって、理解のレベルに違いがあることが分かる。例えば、自己の理解に関する変化として、「自分のやりがいや価値観が分かった」という記述(2%)もあれば、「将来の自分、仕事をしている自分がイメージできるようになった」という記述(13%)もある。総合演習Ⅰでは「自分を知る」活動として「やりがい・価値観チェックシート」を実施している。したがって、「自分のやりがいや価値観が分かった」ということは、授業で行なった活動によって得られた直接の結果である。一方、「将来の自分、仕

事をしている自分がイメージできるようになった」ということは、自分のやりがいや価値観を知り、自分のやりがいや価値観に合った職業を探し、その職業について調べ、そしてその仕事をしている自分について考えることができて初めて得られる成果である。つまり、「自分について知る」活動を行なった後、職業について知り、職業と自分を照らし合わせ、再び「(将来の、仕事をしている)自分について知る」活動を行なった成果と言える。「職業理解」についても、「職業についての知識が得られた」(36%)という、職業調べの活動による直接的な成果から、「就職後のプロとしての責任や厳しさが分かった」(10%)という、就職後に職業から自分に要求されることについてまで理解するというレベルまで、職業理解のレベルが異なる記述が得られている。

5. 結論

本研究では、教職科目「総合演習Ⅰ」で実施しているキャリアプランニングの授業を、これまでの授業実践の問題点や大学におけるキャリア教育の現状を踏まえて改善し、受講生の学習活動を分析して、体育専攻生のキャリア観やキャリアプランニングに対する取り組みの特徴を把握するとともに、体育専攻生のキャリア教育としての効果と改善点を検討した。

①「自分を知る」「職業について知る」「職業と自分を照らし合わせる」という活動を十分に行う、②不明な点や問題点が出てきたら、①の活動を何度も繰り返せるようにする、③こうした活動を繰り返すことが問題解決学習であり、生きる力の育成につながることを意識させる、④職業に関心を持っていないレベルから就職対策を立てるレベルまで、どのレベルからも始められどのレベルまでも進めるようにする、という観点から授業計画を改善した。

計画に従って授業を実施し、受講生のワークシートを通じて学習活動をモニターして学習活動の進行状況や問題点を把握し、集計結果や受講生が書いたワークシートの記述をいくつか取り上げて、学習活動の進行状況や問題点を示す例として全受講生にフィードバックした。

授業開始当初、就きたい職業を一つにしぼって挙げる事ができた受講生は半数であった。最も多く挙げられていた職種は教員で、選択肢の一つ

として挙げている者も含めると、全体の47%が就きたい職業・関心のある職業として挙げていた。

職業探索のために、「自分について知る」「職業について知る」「職業と自分とを照らし合わせる」活動を行なったが、これらの活動を繰り返して自分の課題を順に解決している受講生と、活動を表面的に行なっているだけの受講生に分かれていることが分かった。また、表面的な活動に留まっている理由として、1年次からキャリアプランニングをすることの必要性を感じていないこと、また反対に、就きたい職業があるということで職業探索の課題はもう解決したと考え、活動の重要性を感じていないこと、があることが分かった。

「自分について知る」「職業について知る」「職業と自分とを照らし合わせる」活動の必要性や重要性を感じていないために、単に職業や自分について調べているだけの事例から、これらの活動を繰り返して職業選択に関する様々な課題を解決している事例まで、複数の受講生の事例を全員に提示し、これまでの活動を課題解決活動の繰り返しとして整理させた。その結果、何らかの課題に取り組んでいるものの、課題に対する答えを出さないうまま次の課題に取り組んでいる受講生がいることが分かった。課題解決ができていないケースでは、課題を解決するために集めた情報を適切に解釈できていないか、あるいは集めた情報に基づいて判断するための基準をもっていないことが分かった。

総合演習Ⅰの授業を通しての受講生の問題解決学習を分析した結果、職業について知るだけの調べ学習に留まっていた受講生がいたが、職業と自分を照らし合わせる課題からさらに進んで職業選択の課題、就職準備の課題に取り組んでいる者もいた。

総合演習Ⅰの効果として、職業に関する知識が増えたこと、将来のことを今から考える必要があるという意識の変化を挙げる受講生が多かった。また、授業で行なった活動によって直接得られた知識や情報を成果として挙げる者だけでなく、授業で行なった活動の重要性が分かったことを成果として挙げる者もいた。授業を構成していた、自己理解、職業理解、職業適性の理解については、いずれも効果があったと受講生に認識されていた。しかし、受講生によって、自己や職業、適性についての理解のレベルには違いが見られた。

以上のことから、本実践によって、受講生は「自分を知る」「職業について知る」「職業と自分とを照らし合わせる」という活動を行い、各自の職業に対する関心のレベルに対応した課題に取り組むことができたと言える。また、自分の課題を解決するためにこれらの活動を繰り返した受講生は、活動の重要性や、課題解決活動を繰り返すことの意味を実感できたと考えられる。

6. 研究の限界と今後の課題

本実践は、受講生の職業意識の個人差に対応して、職業に関心を持っていないレベルから就職対策を立てるレベルまで、どのレベルからも始められどのレベルまでも進めるようにすることを改善ポイントとして挙げていた。そのため、受講生の学習の進行状況や問題点をモニターし、その結果を基に受講生に対する働きかけを変えていった。例えば、逐次受講生に学習の進行状況や問題点フィードバックすることによって、自分の学習のレベルと問題点を確認させ、問題を解決するヒントと次のレベルの事例を示していた。251名の受講生のワークシートを次の授業の打ち合わせまでの4日間程度で分析していたので、受講生の学習状況の類型化ができただけで、それぞれの類型に当てはまる受講生がどのくらいの割合いたか集計することはできなかった。つまり、学習の進行状況を追い、問題点を指摘しながら学習を改善するように働きかけることはできたが、授業の進行に伴って、どの程度の問題が生じ、どのくらい改善していったのかを把握することはできなかった。本研究によって、キャリアプランニングの学習過程で見られる類型が把握できたので、次の実践ではそれぞれの類型の割合やその変化を数量的に追うことができるだろう。

総合演習Ⅰの最初に、就きたい職業を一つに示して挙げることができた受講生は半数であったが、授業を終えて、職業選択がどの程度明確になったのかを確かめることをしなかった。就きたいと思っている職業があるために、その職業でいいかどうかを十分確認しないまま、職業探索の課題が解決したと考えている受講生がいることが確認されていたからである。ここでは、職業選択に関する見せかけの学習成果を証明せずに、次の学期に開講されている総合演習Ⅱで再度職業選択の課題に取り組ませることにした。

就きたい職業があるというだけで職業選択の課題が既に解決したと考えて、職業についてよく調べなかったり、自分と照らし合わせて適性を確認しなかったりするということや、情報を基に判断を下さないまま延々と情報だけを集めていること等から、受講生が将来の職業を選択したり職業に関する意思決定をすることを躊躇していると感じた。浦上⁷⁾は、進路決定を難しくしている原因として、一度選んでしまったら取り返しがつかないかもしれない不安、不確定な要素が多過ぎて予測しにくいこと、予測するために多くの情報を得ると今度は扱いきれずに混乱すること、選ぶ時の基準があいまいで絶対的なものがないことを挙げている。そこで、総合演習Ⅱでは、職業を選択することの難しさについて考え、それぞれが抱えている不安や混乱に対してどのように対処したらいいか考える活動を中心として進めることとした。

「総合的な学習の時間」の活動でも、キャリアプランニングの学習でも、陥りやすいことは、単なる調べ学習や体験しただけに終わってしまうことである。調べることで得られる情報や、体験することで得る新たな感覚は、確かに貴重であるが、活動自体から直接的な成果を学習者が受動的に受け取っているだけでは、学習者はその段階に留まってしまう。活動することによって先に進むことができれば、本研究実践の一部の受講生がそうであったように、その活動の重要性が分かり、活動を繰り返すことによって順に課題を解決していくようになる。このように課題解決のサイクルを繰り返すようになるためには、キャリアプランニングに関しては、選択することの不安を取り除くこと、そして、本実践でも他の受講生の事例を示したように、課題解決活動の具体的な事例を示すことが重要であると考えられる。

また、得られた情報を基にして解答を出すこと、すなわち「結果の考察」という認知的活動が難しいことから、職業や自分に関して得られた情報をどのように解釈したらいいかが分かるような活動を行う必要があるかもしれない。例えば、職業に関する情報を次々集めているような場合、その職業に関する情報一つ一つについて自分がどう思うのかを考えてみるといったことである。職業や自分に関する情報それぞれについて自分が思ったことを見直して、自分の判断基準を把握する、といった活動を行うといったことが考えられる。

引用文献

- 1) 樋口 満(1999)：中学校学習指導要領. 時事通信社.
- 2) 三木ひろみ・岡出美則(2005)：「総合的な学習の時間」のための教職科目－筑波大学体育専門学群での実践. 筑波大学体育科学系紀要, 28, 43-55.
- 3) 宮崎 猛(2002)：進路でつくる「総合的な学習」. 小学館.
- 4) 文部省告示(1999)：高等学校学習指導要領. 大蔵省印刷局
- 5) Pettipas, A., Champagne, D., Chartrand, J., Danish, S., and Murphy, S.(1997): Athlete's Guide to Career Planning. (田中ウルヴェ京・重野弘三郎訳, 『スポーツ選手のためのキャリアプランニング』大修館書店, 2005年)
- 6) 関口和代(2005)：大学におけるキャリア教育. 川端大二・関口和代編著 『キャリア形成 個人・企業・教育の視点から』 pp. 113-136
- 7) 浦上昌則・三宅章介・横山明子(2004)：就職活動を始める前に読む本. 北大路書房